

浄

monthly
JŌDO

土

February 2002

23

合併号



法然上人鑽仰会

ブロードバンドは、サービス品質で選ぶ。

サービスはお客様のために
日本テレコム

ODNのADSLは最大1.5Mbpsの
超高速インターネット

※回線速度は、あくまでも理想値で保証されるものではありません。
また、使用場所からの距離などの要因により変化することもあります。

コンテンツも充実

ODNの「ブロードバンドチャンネル」は、音楽やスポーツ、
エンターテインメントドラマ、料理など楽しい内容が盛り沢山。

さらに大幅値下げ!

2,880円/月
24時間
常時接続

○初期費用6,600円～
○モデムレンタルの場合 500円/月
※NTT東日本・西日本の回線使用料として10円/月(タイプA)が別途必要です。
※記載の価格は消費税別
(平成15年10月現在)

サービス
提供エリア
拡 大 中

札幌・仙台・東京・立川・
国分寺・武蔵野三鷹・千葉
市川・川崎・横浜・浦和・
川口・名古屋・京都・大阪
茨木・豊田川・八尾・岸和
田原・堺・和泉・神戸
北九州(平成15年5月10日現在)

※上記のエリアであっても、ご
提供できない場合があります。詳しく
はホームページ、またはテレ
コンサービスまでご確認ください。
[提供エリア検索ホームページ]
☎0088-222-3575
http://www.odn.jp/guide/

ODNフレッチADSLプランもあります。

大幅値下げ

日本全国
エリア拡大中

無料サポート
365日

安心の
回線システム



初心者でも安心の
サポートサービス

お問い合わせ
お申し込み
ODNサポートセンター J-DSL 担当デスク
(受付時間) 9:00～18:00 (年中無休)

☎0088-222-375

日本テレコム
ならではの
保守管理体制

インターネットは日本テレコム
ODN
Open Data Network

ODNのADSL
J-DSL
パーソナル

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の
心の故郷を紀行する。

東京金町

貞林 瑞正寺

雲晴山貞林院瑞正寺、中興開山林政方前住職（左）と第三十世林清方住職。下は東京金町にある雲晴山貞林院瑞正寺本堂。





雲晴山貞林院瑞正寺本堂
本尊阿彌陀如来坐像はかつて三田にあった貞林寺のご本尊。



増上寺三十九世阿闍一呼上人尊影模刻、一呼地藏。貞林寺に残っていた像で増上寺三十九世のお顔を模した地藏には上人の面影が偲ばれる。増上寺御忌唱導師を拜命した林政方前住職は、これぞ仏縁と客殿に自筆の名号とともに記っている。



本堂正面の欄間には二河白道（左）と二祖対面（右）が彫られている。法要後にしばしばこの二つの話をされるという。



境内入り口に立つ筆塚。先々代の林祖洞師が建立したもので、誕生仏を冠した筆を思わせる筒には経文が祖洞師の弟子一人一字で彫られている。



三つ葉葵の紋に御忌御用と書かれた木箱。貞林寺の寺宝で御忌の歴史を感じさせる一品だ。



貞林院瑞正寺はかつて水元公園と隣接していた。写真は公園内の水元大橋。

錦洞（林政方前住職の号）文庫が建
つ岩手県遠野の善明寺本堂。林政方
前住職はこの善明寺に生まれた。



善明寺本堂。取材の時に貞林院瑞正寺と同じ
東京教区北部組の寺院の団体参拝があった。
善明寺は林政方前住職のご長男、林英道師が
住職を努めている。



金光山善明寺第五十四世林英道住職。



錦洞文庫入り口での林錦洞師。
昨年秋の撮影だが、白い髪と髭
はまさに芸術家の風貌。



遠野を代表する観光地の河童淵。
この自然豊かな山間の町で林政方
前住職は中学まで育った。

浄土

2002/2・3月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・貞林院瑞正寺…タカオカ邦彦	1
追悼特集 大橋俊雄上人	6
寺院紀行・東京金町・貞林院瑞正寺	真山 剛 16
連載 民話をたずねて	石崎敬子 26
表紙の言葉	33
空也上人	田中 允 34
響流十方	小村正孝 38
くすり箱	市川真人 42
シリーズ詠唱 寺院便り	塩釜雲上寺 44
コラム	佐々木美冬 46
Jフォーラム	47
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子 48
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし 51
編集後記	52



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

追悼 大橋俊雄上人

法然上人
最後の正月

浄土 昭和三十年一月号より

大橋俊雄

承元元年の年もおしつまつた師走の八日、最勝四天王院供養の大赦によつて元祖は流罪を許された。配所の日をながめたのは僅か九ヶ月にも満たなかつたが、そして邊陲の地に赴いて田夫野人に念仏を勤ることを朝恩とも言ひ、楽しみとしていた上人ではあつたが、老齡既に七十五才になん／＼としていたお身ではさぞかし強く身にこたえた事であつたろう。兼実や光親等公達の運動があつたとはいふものゝ勅免の早さに驚き、配所の人々は別れを惜しみ、都に残つた門弟達は再会の喜びに心おどり、悲喜こも／＼の心情ではあつたが、念仏門に入つた老若男女の群れに送られて配所を出られたのはそれからまもなくの事であつた。しかし都の出入だけは中々許されなかつたので、攝津国勝尾寺にしばらく住むことにした。年月の立つのは早いもので、此處での仮住いも早や四年、建暦元年の秋になつても入洛の宣旨は出されず、それが十一月の十七日になつてようやく宣下がさがり、再

び都の土を踏むことができたのは二十日のこと、人々は随喜の涙を流して喜んだのであった。都に入ってから元祖は、かつての檀越関白兼実公の弟君慈鎮和尚の計らいで、大谷の禪房に住いすることになった。大谷の清流は汲めども汲めどもつきない。念仏の興行は元祖を迎えて急に活発となってきた。一時灯の消えたような京の町にも光明がさしこんで来て、それからというものは法を尋ねんとして、元祖のもとに集まる者はあとをたゞず、入洛最初の供養の如き一夜のうちに一千人もあつたということである。

あわただしき中にも、建暦元年の年を送つてあらたまの年を迎えた。帰洛の喜びを外にただひたすらに念仏をすゝむる元祖も、有為転変の有漏の姿を十分に理解されてはいたものの、あれやこれやの輻輳した事情に、少なからず心を痛め、ふとしたことで年のおしまる頃から病を得、病床の人となつてしまった。寄せくる年波、萎び行く身の上に一入輪

をかけて心痛がはげしくなつた所為もあつたのであろうか。年頭の賀もそこくに、二日には最早や食事が進まず、耳も遠くなり、病は日に日に抗進するかに見えて来た。七草小正月をすぎるに従つて、集る弟子達も次第にましてきた。病勢は愈々募つてきたらしい。それもやがて変り目も耳も昔日と変らぬ程に、はつきりとよみがえつてきたので、側近にはべる人には愁眉をひらき、又不思議な思ひにひたつたのであつたが、それは丁度灯心がまさに消えんとする直前に、一瞬バツと消えがけの光を放つようなもので、往生の前奏曲にしかすぎなかつた。全快はおろか病は篤くなる一方、でも高声念仏はたゆみなく続けられ、みとれる弟子達には醇々として往生の事を談じていた。極楽の莊嚴、来迎の相を見てからは愈々往生の期の近きを知り、源智の請にこたえて一枚起請文を授け、病床に正月を送つた元祖は、その二十五日安然と弟子達の助音する中に、安養の浄土へと旅立たれた。

追悼 大橋俊雄上人

平成十三年十二月二十六日

御遷化

英蓮社智譽上人同阿修史菽水俊雄大和尚

本山蓮華寺第五十三世

大橋俊雄

行年七十六歲



大橋俊雄上人（平成13年11月5日撮影）

追悼 大橋俊雄上人

大橋俊雄（おおはし しゅんのう）上人は、本山蓮華寺の貫主であるとともに、岩波書店をはじめ評論社や講談社などの一般書の大手出版社から、法然上人の入門書などを発刊されていたことで有名です。

最近では、岩波文庫から『選択本願念仏集』を発刊され、また御遷化される直前まで岩波文庫から『法然上人行状絵図』の発刊に勤められ、ご本葬の当日にその発刊が決まる報が届きました。それは上人へ何よりもうれしい献句でした。また大橋俊雄上人は、私たちの月刊『浄土』にも昭和二十年代半ば頃からたびたび寄稿をして頂いておりました。

心から哀悼の意を捧げ、還来穢国度人天を念じ上げます。

大橋俊雄上人が自ら往生の近きを意識されたのは、平成十二年七月二十八日のことだそうです。上人はそれ以来『一紙小消息』に示されています「受け難き人身を受けて、あひ難き本願にあひて、発し難き道心を発して、離れ難き輪廻の里をはなれて、生まれ難き浄土に往生せんこと悦びの中の悦びなり」のお心で念仏生活を送り、毎日境内外の清掃と農事、そして研究と執筆を友とし、最後まで現役をモットーに過ごされました。

そして遷化される半年前、弟子である渋谷聡明師に、ご自身の半生をまとめあげた原稿「学問を志して五十年」と、上人が全国規模での最後の講演となった平成十二年九月二十七日の蓮華寺による総本山知恩院布教師大会での講演録「御忌の回顧と展望」の二本の自筆をとられた草稿を渡され、「この原稿のことは誰にも言うな。息子や妻にも言わないでほしい。そして私が死んだときにこれを息子に渡して本にして、本葬か四十九日忌のときに皆に引いてほしい」と言われたそうです。

そして、平成十三年十二月に入ると、講演や原稿の依頼に対して、電話で「今、時間が無くてその話はお受けすることはできません」と断り、二十四日には湯灌だと言って一人で風呂に入り、翌二十五日は髪をそってくれと言われ奥様がそったそうです。そして寝る前には、いつものように日記をつけ、「もう遅いから早く電気を消し

て寝なさい」と言つて床についたとのことでした。

翌二十六日早朝、ご家族が気がついた時にはすでに冷たくなつていたとのことでした。しかしそのお顔は微笑んでいるようだったとご子息は記しています。

「上人は本当に密度の濃い人生を送つた方でした。遊びという隙間があれだけない方は珍しい、普通の人の倍は働いたのではないでしようか」と本山蓮華寺執事長澤田真弘師は述べています。そしてご子息もこの言葉が一番上人に適切だとおっしゃり、息子から見ても七十六年間、これほど密度の濃い人生を過ごした人間は存在しないでしょう。そしてこれが限界だったのではないかと述べています。

ご子息は最後に「人間とは亡くなることがわかつててもこんなに冷静に自分自身を見つめることができるのかと感じます。そして、最後の最後まで六波羅蜜の生活を送り、特に忍辱とそして戒名にあるような救水の生活を送つた、やさしくも厳しい、師僧であり父である大橋俊雄をもつたことを誇りに思います」と結び、追悼の言葉とされています。

これは、渋谷師が俊雄上人から託された二編の原稿をまとめられ、『偲び草』として刊行された遺稿集の、遺弟渋谷聡明、大橋俊史師の文から抜粋させて戴きました。

(編集部)

略歴

一九二五年 神奈川県に生まれる

一九四八年 大正大学文学部仏教学科卒、日本仏教史研究会、時宗文化研究所研究員、日本文化研究所講師等歴任、

一九六〇年 神奈川県横浜市西林寺住職

一九九八年 滋賀県本山蓮華寺第五十三代貫主就任

主な著書

法然—その行動と思想、一遍—その行動と思想（評論社）、日本思想大系一〇（法然、一遍）（岩波書店）、アジア仏教史日本篇共著（平安仏教、鎌倉仏教Ⅰ、Ⅱ、室町仏教）（佼成出版社）、昭和新修法然上人全集（再版）共著（平楽寺書店）、法然入門、法然上人全集第一巻〜三巻（春秋社）、法然（選訳本願念仏集）、一遍（一遍上人語録）（岩波書店）、マンガ法然入門（サンマーク出版）、法然上人伝上下（春秋社）、浄土宗必携、図説五重相伝、授戒会共著（斎々坊）、法然上人事典（双樹社）、選訳本願念仏集（岩波文庫）（岩波書店）、法然（講談社学術文庫）、一遍（講談社学術文庫）（講談社）、法然さまと選訳本願念仏集（なむブックス）（浄土宗出版室）、一遍聖絵（岩波文庫）（岩波書店）、浄土宗人名事典（斎々坊）

などなど多数

刊行予定

法然上人行状絵図（岩波文庫）（岩波書店）

寺院紀行

東京・金町

貞林院瑞正寺

撮影／タカオ力邦彦
文／真山 剛



貞林院瑞正寺第二十九世林政方前住職が平成十四年浄土宗大本山御忌唱導師を務めるにあたり、平成十三年十月、増上寺よりの使者が貞林院瑞正寺に訪れ、親書伝達式が行われた。その時の記念写真。増上寺執事長、使僧、組長などの役職者、総代、住職はもちろんご長男も遠野より馳せ参じた。

「隣で一緒に朝飯を食べてた奴が、夕方にはもういない。特攻で散っていくんだ。もう、夕飯には帰ってこない。」

平成十四年四月、浄土宗大本山増上寺の御忌唱導師の大役を拝命した林政方貞林院瑞正寺長老の原点はここにある。

この唱導師の法要に、海軍飛行予備学生第十四期の同期であり、茶道界の大御所、千宗室氏からこんな一文が寄せられている。

「(前略) また、学徒出陣により十四期海軍飛行専修予備学生として航空隊に入隊、戦後五十余年の後半生を散華した同期や物故諸兄の鎮魂の為に我々同期と共に歩み続けておられます。この度の御忌法要でも同期英霊の慰霊供養の回向を志しておられるとのこと。残された余生を一貫して所信の実現にご活躍されることを祈念し、学兄のご多幸をお祈りいたします。」

今回訪れた貞林院瑞正寺は、東京北郊の金町にある。その名が示すように、貞林寺と瑞正寺という二つのお寺が合併したお寺である。合併は昭和五十三年、大本山増上寺のお膝元である三田にあった貞林寺を瑞正寺が吸収する形となった。

当時、両寺の住職をされていた林政方長老の大英断であった。檀家数も少なく経済的に行き詰まりがちな両寺を合併するまでに



緋衣をまとい、本尊前に端座する林政方前住職。

は多くの時間と労力を要したという。

こうした二つのお寺を合併した寺院は浄土宗にはいくつかあるそうだが、このように二つの寺院名を残すケースは希だそうで、この貞林院瑞正寺はそうした数少ない寺院の一つだそう。

貞林寺は慶長十六（一六一一）年、貞林上人によって江戸八丁堀に創建され、寛永年間に三田に移転した寺院。一方、瑞正寺は天文七（一五三八）年、本瑞上人が建立している。瑞正寺に伝わる火伏観音像は、徳川綱吉の頃、この地の地頭だった松浦河内守信正公の守り本尊で、江戸時代はもちろん太平洋戦争の時も近辺が被災せずに済み、これもこの火伏観音の御利益と、今も地元の人々の信仰を集めている。

合併に当たっては両方の名前を残そうと、貞林寺という寺号を院号とした。同時に本堂を新築、昭和五十五年に貞林院瑞正寺として生まれ変わった。生まれ変わった貞林院瑞正寺の新本堂はコンクリート作りだが、転法輪をイメージした梁が四方八方に伸び、コンクリート作りにありがちな、単調さや威圧感がない。後に述べるが、書という世界で名をなした林長老の芸術家としての感性が、見事に具現化された伽藍である。

さて、この林政方長老は肩書きの長老が示すように、いまは住職



瑞正寺の寺宝、尖伏観音像のお前立ち。徳川綱吉が將軍であった頃の地頭、松浦河内守信正公の守り本尊だった。火事の多かった江戸時代はもちろん、昭和二十年三月の東京大空襲でも被災を免れたこともあり、地元の信仰篤い観音様だ。また、山門わきには大きな防火用水槽があり、消防署に提供している。

貞林院に残されていた寺宝、高村光雲刻の魚籃観音木像。白檀材の一本造りの逸品だ。



を退かれた身である。住職を退くということは、一般社会で言えば定年退職である。六十歳、遅いところで六十五歳だが、林長老も六十五歳で自ら住職の座から退いている。

「私の岳父祖洞は、私が二十七歳の時に遷化しました。そうした経験から、住職を継がせるのなら若い方がよい、と思っていましたから。」

林長老の退山は昭和六十二年、この貞林院瑞正寺と岩手県遠野の善明寺の二か寺から同時に退いた。

さて、突然出てきた善明寺だが、民俗学者の柳田国男著『遠野物語』で知られる、あの遠野の名刹である。善明寺は遠野にある唯一の浄土宗寺院で、林長老の生家でもある。林長老は大正十一年、この善明寺で生をうけ、旧制中学卒業までをこの遠野で過ごし、

善明寺は承安二（一一七一）年に開創された養安寺が、寛永四（一六二七）年に遠野に移転するとともに改名された寺院で、現在は林長老の長男、林英道上人が第五十四世となる古刹である。

その善明寺を離れ上京、林長老は大正大学仏教学科に入学する。當時を思い出しながら、こんな話をしてくれた。

「田舎の貧乏寺の倅だから、大学へ通うのも大変だね。今は京都の大本山清浄華院のご法主（住職のこと）になられた大田秀三台下を



厨子に納められた小伏観音像。身丈二十センチの立像で普段は厨子が閉じられている。

はじめ、机を並べていた多くの学友に、『林、お前は「一枚起請文」だな』とよくいわれたね。なぜって着物が一枚しかないからさ。着たきりで襟が真っ黒だった。」

そうした中で、後に書生となつて師事する林祖洞先生と出会う。

林祖洞先生は浄土宗の僧侶であると同時に、日本を代表する書家でもあり、林長老も学業の傍ら先生に師事し、書の研鑽に励んだのである。

貞林院瑞正寺の参道脇に、筆と硯をイメージした石碑が立っている。いわゆる筆塚で、祖洞先生の百人以上の門下生が一字ずつ書いた経文が彫られている。

同じ門人の一人になつた林長老は、その才能が天性のものであつたのか、師事した年に二つの展覧会で入選、翌年に錦洞という雅号を許されている。

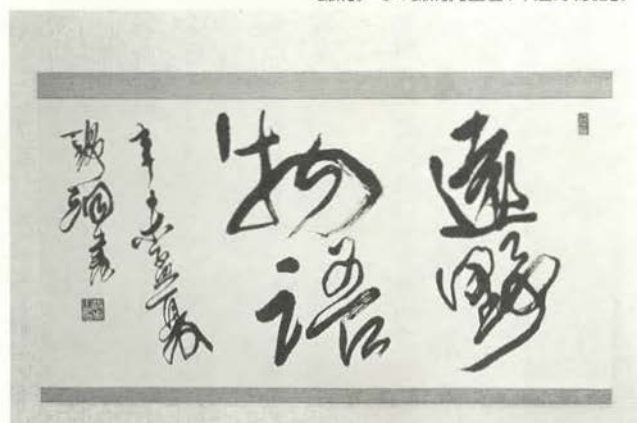
先に紹介した善明寺の境内には林長老のこの雅号の入った「寺宝館錦洞文庫記念館」が建っている。平成四年に開館したこの記念館には林長老の書はもちろん、師祖洞先生や、さらにその師にあたる西川春洞師、中国の大家の作品を始め、祖洞師、錦洞師の二代で収集した作品が二階建ての展示場狭しと並んでいる。

さて、祖洞先生の書生となり、ようやく学費の心配をしなくてよ



貞林院瑞正寺のある金町は浄水場で有名、都民へのおいしい水の供給源だ。右に流れるのは江戸川。

書家として有名な林政方前往職の号は
錦洞。その錦洞先生書、「遠野物語」。



柳田国男の『遠野物語』で一躍有名
になった遠野は、岩手を代表する霊
峰早池峰山に抱かれた、なだらかで
広々とした町だ。

くなった時に、今度は太平洋戦争が待ち受けていた。

戦中での繰上卒業。そして学徒出陣が始まり、いつ軍隊入りかという最中、大正大学浄土学部へ進学する。その時の印象的な話がある。仏教学や哲学へ進もうとする友人を説き伏せたエピソードである。

「貴様ら、俺たちは戦争で死ぬかもしれない。日本国の為だが、いざ死ぬといった時に、本当に安心して死ぬるか？ 本当に納得して死ぬるか？ 俺たちは寺の生まれだ。阿弥陀様への仏飯で育ったきた。だから、念仏がある。その念仏を信じ、そして極楽浄土をしつかり見据えずして死ぬるか？ 学ぶべくは浄土学だろう。」

こう言ってみんなを説得して浄土学へ進ませたんだ。あの頃は死が隣り合わせにあった。みんなも必死、僕も必死だった。」

冒頭に述べた原点とは、この死と隣合わせの中での念仏求道精神である。苦学の中、戦争という状況下で、林長老が追い求めたのはまさに浄土宗の根本の教えであり、信心であつた。

インタビューの中で林長老は「一期一会」という言葉を繰り返された。今できることは今やる、明日には延ばさない、明日の保証はないのである。打ち込むべきは今しかないのである。

昭和十八年、遂に出陣。神宮外苑の壮行会に列席し海軍へ。航空

隊に配置されるが、運よく終戦を迎えることとなる。翌年には大正大学の浄土学副手となる。そして昭和二十二年には林祖洞師の娘さんと結婚するが、それも束の間、二年後には祖洞師が遷化されてしまう。

恩師であり、書の師であり、義父ともなった祖洞師の死は林長老に学問の道だけでなく、書の道も同時に歩ませることとなった。

というのも、祖洞師は書家として多くの門人を抱えていた書道共励会（現菽水書人社）の主催者でもあり、書道からの収入も貞林寺と瑞正寺の支えになっていたからである。

今の東京では、お寺さんは経済的には恵まれているといった感があり、実際そういうお寺も少なくないかもしれない。しかし、それは戦後の経済成長に伴う東京への一局集中化による檀信徒の急増によるもので、戦後間もなくは、まだまだ田んぼや畑が広がり、お布施が芋や大根という時代があった。そうした中で十分な檀家を持たない寺院を二つも抱えていくことは、容易なことではなかったのである。

祖洞師の後を継ぐこととなった林長老は、そのあふれる才能に、足元に打ち込む精神力が加わり、日展の連続入選を始め、書の世界での役職就任、個展開催、そして浄土宗芸術協会設立、役員就任な

錦洞文庫内には超一流の書家を思わせる様々な書などが並んでいる。鶴田浩二さんからの私信なども飾られるなど、交友範囲の広さも伺える。



ど、書の世界での活躍は枚挙に尽きない。

しかし、そうした書の世界での活躍を支えているのは、やはり念仏信仰という原点だ。林長老は好んで経中の句を書かれている。

「振り返れば、寺という土台あってこそその八十年なんだな。今回の唱導師も、念仏の祖法然上人への報恩の中で、そうしたことを確かめられる思いがある。」

増上寺の御忌法要では、林長老は唱導師として、自筆・利剣名号の書を織った七条という重たい衣をつけ、天気が良ければ門前の寺院からお練りをする。数百メートルを歩き、階段も登る。そして一時間を超える法要だ。体力もかなり要求される。そこで林長老はこの正月から体力作りに取り組んでいる。毎日の海軍式体操とウォーキングだ。それに昨年十二月八日、成道会そして太平洋戦争の開戦日から好きなたばこも断っている。

貞林院瑞正寺の檀信徒、林長老の次男である清方住職、そして遠野の善明寺の檀信徒に、長男の英道住職も参拝される。自分を支えてくれたこうした方々の前で、林政方長老はどんな思いで仏子をふられるのであろうか。

ひと振り、ひと振りに念仏への想いが、そして八十年の人生の一步步の思い出がよみがえるに違いない。

(ルポライター)



善明寺には伝恵心僧都の本尊阿彌陀如来坐像を始め多くの寺宝が残っている。写真はそのうちのひとつ、観無量寿経曼陀羅。

民話
をたずねて

連載

石崎敬子

鬼と節分



YUKAWA

昔、山奥の村に、トトとカカが仲良く暮らしておったと。

ところが、たいそう貧乏で、節分の前の日、二人して思案しておったと。

「明日は節分というのに、何も無い。どうやって、節分を迎えたら、ええんじや」

はあと、トトが大きなため息をついたと。

「そうじや、思い出した。おらが、嫁に来るとき、しめてきた腰巻がある。あれを売って年取りをしよう」

カカは膝をぼんと叩き、トトの前に向き直ったと。

「おお、そうじやな。おまえには、苦勞ばかりかけてすまんが、それを売って年取りをしようか」

そうしよう、そうしよう、カカは行李の中から、腰巻を取りだして、町の店に売りに出かけた。腰巻が思いの外、高い値で売れたんで、カカは酒やら米、メザシや醤油、それに豆を買って帰ったと。

カカは早速まんまを炊き、トトはメザシを焼き、酒の燗をするや

ら、豆を煎るやらして、ごつつおをたんと作ったと。

「さあ、これで節分を迎えられる。カ力、カ力、人は『福は内、鬼は外』と、豆まきするけど、毎年そう言うても、ちいっとも楽にならねえ。今年はあべこべに言ってみねえか」

「うん、それもええな」

さて、節分の日、

「カ力、ええか、そんなら言うぞ。福は外、鬼は内！ 福は外、鬼は内」

「おらも言うぞ。福は外、鬼は内！ 福は外、鬼は内」
って、トトとカ力はでっかい声で、豆をまいたと。

部屋から部屋へと豆もまき終わり、二人して年取りの膳に向かったそのとき、

「ごめんくだされっ」

と声がしたと。見ると、赤鬼どもや青鬼どもが、でっかい鉄棒をがつん、がつんと突いて入って来たと。トトとカ力は腰を抜かさんばかりに驚いたと。

「そんなにたまげてくれるな。どこへ行っても、鬼は外、鬼は外で、おら達は追われるばかり。おまえ達が、鬼は内、鬼は内とおら達を呼んでくれたんで、寄せてもらた」

つて、鬼どもは年取りの膳の前にどかどかと座り込んだと。

「おまえ達には心配かけねえから、今晚は泊めてくれ。おら達は何も持っておらんが、ふんどしをほどいてやるから、これを町で売って、何か買ってきてくれ」

鬼どもはそう言つて、赤いふんどしと青いふんどしを力かに渡したと。

力力は、そのふんどしを町の店に持つて行つたと。店の番頭は、ふんどしを手にとつてあちこち調べておつたが、奥の部屋にふんどしを持つて行つたと。それきり、なかなか出てこなかつたと。力力は心配になり、そわそわしておると、やつとこき番頭が戻つてきたと。

「主人と相談したけど、そう高くは買えんな」

番頭にそう言われ、力力はおそろおそろ聞いてみた。

民話

をたずねて



「どれくらいで買ってもらえる」

「千両よりは、出せん」

つて、カカの目の前に千両の金を揃えたど。

カカはたまげたが、よっころしよと千両を背負い、帰り際に、酒や米、それに肴をたんと買ったど。

さて、やつとのことで家に着いたカカは、待っていた鬼どもに

「さあ、うんと飲みなされ、うんと食べなされ」

と、酒やごっつおをすすめたど。

そのうち、酔いがまわった鬼どもは、

「さあさ、歌おうぞ、踊ろうぞ」

と、ふんどしをほどいて、えんやらやあと踊り始めたど。

その騒ぎを聞きつけた隣の爺さまは、

「はてさて、隣では何事ができたやら、馬鹿に賑やかだとも、ひとつ行ってみよう」

つて、そつと戸の隙間から覗いて見たど。するとどうじゃ、ふんどしを脱いだ赤青の鬼どもが、楽しそうに踊っておったど。その姿の

おもしろいこと、おかしいこと。隣の爺さまは、思わず家の中へ入っていったと。

「そこにおるのは、何もんだ。酔っぱらいか」

トトに見つかった隣の爺さまは、

「酔っぱらいじゃねえ。正気だ。隣の爺だが」

って、大声で言ったと。

「なにっ、鍾馗しゅうきじゃと。こうしてはおられん」

って、鬼どもはふんどしや鉄棒を置いたまま、わらわらと裏口から逃げていってしまったと。

カカとトトは、あとに残されたふんどしと鉄棒を町の店に持って行き、金に換え、大金持ちになったと。

いちがさけ申した。



◆表紙の言葉◆

能素描

弱法師

よろばし

表紙画と文

鈴木奈緒

この能の作者は、世阿弥の長男の観世元雅と伝えられている。時は早春二月、梅の香のただよう天王寺の境内での、弱法師と呼ばれる心清い純粋な青年の物語りである。

河内国高安に住む、左衛門尉通俊は、人の讒言を信じて、我が子俊徳丸を追い出したが、後悔して天王寺で俊徳丸のため七日間の施行を行っている。

悲しみに泣き暮し今は盲目の乞食の姿となって、杖にすがってよろよろとよろめき歩く少年を、人々は弱法師と呼んでいた。

通俊は言葉をかけ、施し物を与える。俊徳丸の衣の袖に施し物と共に梅の花がひらひらと舞い落ちると、詩心豊かに梅の香を讃える爽やかな若者。時は正に春分の日、入日に西方浄土を観る日想観を拝する俊徳丸は、かつて見た難波の情景などがありありと盲目の目に映じ、謡い舞い遊ぶ。

この雅びな乞食をよくよく見た通俊は、我が子俊徳丸と気付き詫びながらその手をとって、共に高安の里に帰って行った。

プロフィール 1947年 三岸節子先生に師事
1950年 女流画家協会展 H婦人賞受賞
1983年 秋耕会展 女流会長賞受賞
1994年 秋耕会展 文部大臣賞受賞
個展23回開催

空^こ也^う上^や人

田中允

「クウヤとは俺おれがことかとコウヤ言い」。

日本人の九九%あるいはそれ以上が「空也くうや上人」と発音している。銀座に「空也最中」を売っているお菓子屋さんがあるそうだが、これもクウヤモナカと発音しているようだ。永享二年（一四三〇）十一月十一日、世阿弥ぜあみ（一三六三—一四四三）の次男秦はたの元能もとよしが父の直談を筆録した『世子六十以後申楽談儀』（通称『申楽談儀』）に、

こうや上人の能などに、きんしやをぼうしにきる、是も何とやらんわろし。ただすみぼうしのぬいものをりやくして、としよりしくにこらかしてきべし。衣などもうすずみなどにそめて、きべし

（吉田東伍校註『世阿弥十六部集』初版 本二五四頁。濁点筆者補う）

とあるが、この「こうや」に吉田氏が「空也」と当て漢字の傍註をして居られるのは正しく、これは元禄二年（一六八九）版『三百番外百番』所収の「空也」（謡曲全集下巻、謡

曲叢書第一巻等に翻刻）を指す。（元禄版本は外題で既に「くうや」と誤って居り、内題は「空也」と漢字書き）

吉川弘文館昭和三十八年（一九六三）六月十五日発行の人物叢書の一つ、堀一郎氏著『空也』の冒頭に、

空也くうやはふつうクウヤと呼ばれているが、クウヤが正しい。『往生極楽記』には弘也くわうやとするしてあり、『元亨釈書』巻十四にも「沙弥しあみたるとき自ら空也くうやと称す」と訓註してある。また『七十一番職人尽しごとじん合』には、鉢叩はちたたきの条に「うらめしやたがわさづわさづのぞきのふまで、こうやこうやといひてとはぬは」の一首がある。「こうや」は、「空也」と「来や来や」とにかけたのであり、判詞にも「はちたたきの祖は空也といへり」とある。久しくクウヤとよびならわされたことがわかる。

とある。

「空」は現在ではクウの音しか使われず、コウ

と発音する例は今直ぐには思い浮かばないが、さすがに新村出編の『広辞苑』の「くうや」の條には、

【空也】（コウヤとも）平安中期の僧。

云々……。

とある。現在では「口腔」^{こうくわう}「満腔」の敬意を表する」などにかろうじて「空」を「コウ」と発音する痕跡が残っているが、「腔」の旧仮名は「カウ」と開音になって居り、合音で「コウ」（旧仮名「コウ」）と発音する「空」の熟語としては、めったに使われない「空道」^{くうどう}（トンネルのような穴の道の意）ぐらいしか浮かばず、空也上人（九〇三—九七二）みずからが、無理な読ませ方をしたとも考えられる。そうかあらぬか、歴史の教科書までもクウヤと読んでいるそうだし、大学教授クラスの専門家までクウヤとその著書やテレビの教育番組などでも発音し、そのつど間違いであることを御注意した。

最近では『浄土宗新聞』四七号（平成十三

年十一月一日発行）の、寺内大吉師の「法然上人と女性たち」最終回に、「空也上人」と振仮名があり、私の菩提寺天光院御住職眞野龍海師（元大正大学学長）にお伺いしたところ、浄土宗のみならず、仏教界の殆どの人が「クウヤ上人」と発音していることを知らされたので、ここに拙文を草した。

私は二〇〇一年十一月二十八日に満八十八才を迎え、体力も気力も衰え、この拙文が生涯最後の執筆となると思うので、仏教には関係のないことではあるが、最後に誤読と思われる例をお知らせしたい。

例の『申楽談義』の「田楽の風体」の條に原文では「鼓をもやていゝ」と打て……とあるのを（岩波『日本古典文学大系（歌論集・能楽論集）四八六頁）、校註者は「や、ていゝ」と読んでいるが、これは「やていゝ」と読むべきで、現在も能楽「翁」で小鼓がたびたび打つ「イヤ△、イヤ△」であると思われる（イヤ△△）という打ち方はど

こにもない)。ティが小鼓の現在の「△」(鼓の調緒しらべを強く握って強く打つ甲高い音)であることは、世阿弥の実父観阿弥(一三三三—一三八四)作の「自然居士」に、「船のうちより、ていとうと打ちつれて……」(ティは「△」トウは「ボ」)〈調緒しらべを握らずに強く打つ代表的な小鼓の音色で、俗にボンという〉の擬音で、「ていとう」は「打ち」の序詞)とあることで確認される。

では皆さん「さようなら」。

田中允(たなかまこと)
青山学院大学文学部元教授
幸流小鼓方 重要文化財総合指定保持者

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替0018012145231

神「多くの神々と人間とは、幸福を望み、幸せを願っています。

最上の幸福を説いてください」

釈尊「尊敬と謙遜と満足と感謝と、時に教えを聞くこと、これがこ
よなき幸せである」

（スッタニパータ）二六五）

「しあわせーって、なんだっけ、なんだっけ？」

世代がわかる、と言われちゃいそうですが、十七、八年も前に流行ったコマーシャルの歌が、何とはなしに口に出てきました。脳奥のどこかにしぶとくこびりついていたのですね。それだけ示唆的意味合いの強いコピーだったのかも知れません。

おそらくいつの時代にもあてはまるであろうこの問いかけを、自分のテーマとして捉える必要性を感じるかどうか、まずはそれを自分に聴いてみましょうか。今、「幸せでない」と感じている人はそれに該当するはず。「幸せだ」と感じている人は「なぜ幸せなのか」を確認するのも、今後のために必要ですよ。じゃあ、「幸せでない」とも「幸せだ」とも別段感じていない人は？ 特に意識していなくとも、誰だって「幸せになりたい」と願っているでしょうか、これを契機にぜひ考えてみてください。あれ、結局みんなにとって大切な問いかけってことになりそうですね。そう、きっと人類共通の永遠のテーマなのです。

なぜ「永遠」なのでしょう。

確固たる回答が導き出されることが、まったく期待できないからです。もつともこの手の「問いかけ」は無数にあります。いわく「死とは何か」、いわく「人はどう生きゆくべきか」……

もう一步突っ込んでみましょう。なぜ確固たる回答が期待できないのか。

それは、予想されるあらゆる回答は、客観性も普遍性も完全に満たすことが出来ない性質のものだからです。総論としては大多数が共鳴する最大公約数的な答えは確かにあります。しかし、各論となれば千差万別の受け取り方が出てくるはず。つまり、最終的には個人レベルの判断が求められる問題ということです。

有史以来輩出した著明な宗教家、哲学者といわれる人々は、だいたいにおいてこの命題に挑んできました。誰かが出してくれた答えがあったにもかかわらず、別の人物がまた、同じ命題に挑戦しました。「最終的には個人レベルの問題」だからです。

釈尊もその一人でした。そして、そのたどりついた答えの集積が教典という形になって、二千五百年が経った今でも、私たちは指標をいただけているので

す。でもやっぱり、「これぞ」と決めるのは自分自身。たとえば「満足すること」っていったって、どのレベルをもって「満足」するかは、アナタが決めることなのですから。そこに至ってはじめて、釈尊の教えが「アナタのモノ」になり得るのです。

「明確な答えが出ない命題に悩むのは愚行である」

こんな声もなくはないでしょう。しかし、それでかたづけちゃあ、おもしろくありません。

自分にとつての「しあわせ」島は、人生という大海原のどこかにきつとあるはず。でも、広い海をやたらめったら探したって、見つけるのは難しいし、激流や荒波の、近寄ったら危ない海域だってある。そんな所に流されないためには、どうしても海図と磁石が必要ですね。釈尊の教えがまさにそれなのです。

いつも自分のいる地点をたしかめながら進む。そして、いろんな島を見て、「これぞ私のしあわせ島」ってものを探し出しましょう。

案外、すぐそばの、いつも目にしているあの島がそうだったりして…。

（小村 正孝）

連載

『くすり箱』

最終回

春の薬草(ヨモギ)

薬剤師

市川真人

春の野草の代表的なものにヨモギ(漢名^{がいよう}艾葉)があります。このヨモギ、じつは漢方薬の薬味(材料)としても、民間薬としても使われる代表的な薬草です。

枯れ草の中に緑を見つけると自然が、もう春がそこまで来ているんだよということを教えてくれます。

ヨモギは「もちぐさ」ともよばれ、早春の頃、若芽を摘み、ゆでてアクを抜いてから、お餅に混ぜて搗き、草餅にしたり、おだんごにします。一度乾燥させたものを使用するほうが風味がよいともいわれています。

若芽を摘む時、お母さんたちの手助けをするつもりで手伝って摘むと、子供は、一緒に生えている枯れ草まで一緒に摘んでくれるので、あとの処理が大変でと、有難迷惑がられたものです。

お灸の「モグサ」の材料もこのヨモギです。葉を取り、よく乾燥させ、よくもんで篩^{ふるい}でふるい、綿のような裏の毛を集めたものがお灸のモグサです。モグサを作る時、よくもまなければならぬので、もむくさ^{もむくさ}モグサとか、キウグサ、ヤイトグサともよばれています。どこでもよく繁殖するから四方草^{よもぎ}、また、よ

く燃えるので善燃草よもぎなどの説があります。モグサは久しく経たものほどよい。古いものほど良品といわれ、熟艾じよくかいともいわれています。もし新鮮な艾を灸に用いると、筋脈を傷つけてしまう、といわれています。

☆食 用Ⅱ★若芽と葉が用いられ、若芽は早春三月頃から初夏のころまでの芯芽を用い、葉は秋まで採取できます。

草餅やだんごの他にも、若芽、葉とも、てんぷらにとってもあいます。ゆでて水にさらし、クルミ、ピーナツのあえ物等もお美味しく食べられます。また、ホワイトリカーに漬けますと美味しい、佳い香りの家庭用薬用酒ができます。強壮、健胃整腸、高血圧、頭痛、神経痛等に効果があります。

☆民間薬★腹痛Ⅱ干した葉一回量約3gに水約二合を入れ、半量になるまで弱火で煎じ、カスを除いて温いうちに飲む。★腰痛、喘息、鼻血、痔出血Ⅱ前記の煎じ汁を一日三回飲む。★高血圧、下痢Ⅱ生葉に水を加えてよくすり、

生葉液を取り、布でこし一回盃一杯位を食前に一日三回飲む。★切り傷、すり傷、虫さされⅡ生葉をもんで貼る。又は、生葉液を塗る。★かぶれ、湿疹、あせもⅡ葉十五gを約三合の水で半量になるまで弱火で煮つめ、カスを取り除いて冷し、布に含ませ、患部にあてる。★神経痛、リュウマチ、腰痛、冷感性Ⅱ葉を煎じ、風呂に入る。又、葉を浴剤として風呂に入る。

☆漢方薬★諸出血Ⅱ芎帰膠艾湯（漢方薬は体質により飲んでいい人とこまる人があります。ご相談を。）

わが国に鍼灸医師が渡来したのは西暦五五四年頃といわれ、同時に灸点用のモグサが使われたことは『枕草子』や『後拾遺和歌集』によってもわかりますが、とくに藤原実方朝臣の詠んだ『かくとだに えやはいぶきのさしも草 さしもしらしなもゆる思いを』の和歌は小倉百人一首で広く世人に知られています。



雲上寺吉水流詠唱会

塩釜

雲上寺

当山は人口七万の地方都市塩釜市にありますが、市内には、寺院数が四ヶ寺と人口の割合に寺院が少なく、古くから宗派にとらわれない、地方都市によくある、いい意味での八宗兼学のなかに昔からありました。雲上寺吉水流詠唱会の前身である黒谷仏教婦人会は、昭和初期から三十二世良応和尚が子供会と共に檀信徒教化としてはじめています。

昭和九年良応和尚が遷化し、途絶えていた黒谷仏教婦人会を、三十三世良晃和尚が戦地から復員後の昭和二十三年に復活しています。当時市内四ヶ寺（臨済宗三ヶ寺）で各寺の婦人会が塩釜連合仏教婦人会を組織し、ローテーションで各寺を回りながらの詠歌の



会を実施しており、黒谷仏教婦人会もその中にありました。まだ浄土宗の吉水流詠唱の波が地方までとどかず、花園流でしたが、指導は当山檀信徒の佐藤たまさんと、丸玉さんと親しまれていたのを思い出します。昭和四十九年良晃和尚遷化のあと教区主催吉水流詠唱の講習会が開催され現住良雲が受講したのが現在の雲上寺吉水流詠唱会結成のきっかけとなりました。

会員が高年齢化していたこともあり、黒谷仏教婦人会からスムーズに移行して現在にいたっています。振り返ってみると先々代から先代そして現在と女性教化に大きな足跡を残しているように思えてなりません。

お寺は三代前がすっかり教化をしてくれると三代後にいい結果が残ると言われますが、このことから、先代・先々代に低頭感謝あるのみでございます。

現在は、寺庭婦人が詠唱教師の資格をもつて指導をしています。発足してしばらく



は、音痴で音楽の教養もなく資格もない現在の住職が、若さに任せて楽譜とにらめっこで歌詞の解説に時間をかけ、カセットテープを聞きながら会員を指導していました。

月例会は毎月三十日で、最初に宗歌、次に雲上寺讃歌をお唱えいたします。元塩釜市立図書館長山中正作詩・元宮城フィル指揮者片岡良和作曲によるもので、今の雲上寺がしっかりと詠いこめられているので、歌い終わる頃には身も心も落ち着きます。次に吉水流詠唱信条を称えて始まりです。一時間三十分心底から大きな声でお唱えし、念仏信仰を深め喜びます。吉水流詠唱の会員は、そのまま山華頂婦人会の会員であり、数ある月例会の会員をリードしています。お念仏の助業としての詠唱を心底からよろこぶ当山になくてはならない方々の素晴らしい会ともうせましょう。

東海林良雲



寺院便り、次回は五月号になります。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

〔特選〕

駅前店秘伝の桜餅を買う

●駅

大場清

何代も同じ味を守り続けているしにせだろ
う。ちよつと出かけた時などには買って帰る
のだ。あるいは旅の途中で、評判の店に立ち
寄ったのかも知れない。そのほかこれをどう
読み取るかは、読者に任されている。

〔佳作〕

行く秋の風に耳貸す無人駅

佐藤 雅子

駅裏の鰻鮓に並ぶ寒さかな

依田 恵一

駅までの道のり寒き月を背に

石原 新

●眼鏡

〔特選〕

雪しまく展望台の遠眼鏡

柴田 佳織

観光旅行の途中、眺望がよいという高所に来
たのだが、折あしく雪がはげしくて何も見え
ない。望遠鏡がぼつんと立っているだけであ

選者=増田河郎子

〔特選〕

饒舌のあととうとうと暖房車

島谷ときを

●自由題

る。日頃は威力を発揮しているものを持つてきて、残念さをうまく引き出している。

〔佳作〕

凍蝶に眼鏡をはずし触れにける

金谷 友江

老眼鏡鼻にずらして炬燵守

大村 和代

マスクして眼鏡の曇り拭いけり

小久保 あきを

〔佳作〕

しまく風買ひ物籠に惹とがる

島神由紀子

冬ミつらら眠れば開く嬰のこぶし

北川 弘子

秋捨てるには惜しき一人の柚子湯かな

山田 信子

雲家自由題

※季語ではありません

浄土誌上句会の
お知らせ

参加作品 編集部選

東風

山あいの静けき駅に冬気色
単線の駅寒むぎむと下車二人
俄雪山峡谷を降りつつむ
蒲団千す駅舎の柵の高きよし
風早や旅の途中の無人駅
吊るし柿一つ吹かれて山の駅
駅員の声寒むと終電車
天高し女駅長声澄めり
下り立ちし駅のベンチの冬さこれぬ
手話交え一駅過ぎぬ暖房車
冬の旅路に亡き人想ふ駅
木枯しやひとやすみする道の駅
無人駅に降りる客あり冬桜

締切・四月二十日

発表・『浄土』二〇〇二年六月号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

今井恵子

山本美代子

嶋田喜代子

片桐てい女

山本のり子

河合登美枝

中島一子

細田初枝

増田信子

井村善也

堀管子

金谷友江

中島富士子

眼鏡

伊達眼鏡かけて造語の飛び交ひぬ

うとうとと日向ぼこして鼻眼鏡

逝く年や亡き子の眼鏡拭ひても

春しぐれ眼鏡を濡らし玉光る

白梅や母と渡ししめがね橋

どの眼鏡掛けても同じ顔寒し

展望の覗き眼鏡や冬の雁

小春日や舟こぐ老の鼻眼鏡

新調の眼鏡に弾む街小春

自由題

焼芋の回り囲みて暖をとる

沢庵漬け嫁女覚えて二年目

風垣を過ぎれば暗し海荒るる

六地藏みな半眼に冬ぬくし

悪玉も善玉もいて日向ぼこ

草紅葉ランドゴルフ囲みたる

船腹のハングル文字や鮎積む

のらくろを過ぎし先生懐かしむ

ぎしぎしと蕪村も聞きしか尾根の雪

みどり児の瞳は天空へ柿の秋

雪模様子は関が原越えたら

下町の露地焼諸の声透る

冬の夜や蕎麦に聞く平家琵琶

凛々と老教師たり冬帽子

ひと枝も揺れず小春の山歩き

島訛ははかることのなきマスク

佐藤雅子

嶋田喜代子

片桐てい女

大場清

山本のり子

石原新

河合富美枝

中島一子

細田初枝

今井恵子

山本美代子

佐藤雅子

島谷ときを

増田信子

嶋田喜代子

片桐てい女

飯島英徳

山本のり子

河合富美枝

中島一子

細田初枝

金谷友江

中島富士子

村上青女

池田伊吹

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

外道

仏教以外のお教えや、その教えに従う人々のことを指す言葉で「げどう」と読みます。

仏教の側から見た言葉ですが、浄土宗を開かれた法然上人は、他宗派は一切否定していませんし、慈悲を教える特長にする仏教を思い浮かべた方は、仏教語と聞いて少し違和感を覚えるかもしれませんね。

よく魚釣りで狙った以外の魚が釣れると、それを外道といいます。だいぶ軽蔑の意味を含んだ言葉ですから、あまり使いたくない言葉ですね。



編集後記

鳥合の衆猪突猛進馬耳東風 岱潤

アメリカソルトレイクで冬季オリンピックが開催された。熱戦に一喜一憂された方も多いことだろう。しかし私は開会式のセレモニーを見て、何か背筋の寒い思いがした。あのブッシュ大統領の姿はまさにベルリンオリンピックのヒトラーを彷彿とさせた。貿易センタービルから持ってきたという星条旗の行進、「星条旗よ永遠なれ」のメロディーに乗った、星条旗だけの特別な掲揚、まさにグローバリーゼーションとはアメリカ化であると宣言しているような式であった。

昨年の九月十一日以来、アメリカ人の愛国心がとても目立っているように

感じられる。皆が国旗を持ち、議会で一人アフガンへの武力行使に反対した議員は、マスコミを上げての非難的とされた。ブッシュ大統領が言う正義の旗のもと、今や声高に叫ぶアメリカを抑止する力を世界は失っている。

暴走をおおる愛国心ほど怖いものはないことは、歴史が教えてくれているはずだが、教訓は生きることではない。日本でも最近「国民の歴史」だとか、「国民の敵」などという言葉が表に出てきた。為政者が「国民」と言い出したときは注意が必要だろう。歴史で習った昭和十八年の空気を感ずるのは私だけであろうか。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
村田洋一
佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土 六十八巻一・三月号 頒価六百円

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

印刷 平成十四年二月二十日

発行 平成十四年二月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明堂会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八・六九四七

FAX 〇三(三三)五七八・七〇三六
振替 〇〇一八〇八・八二八七

ポケット版

枕経通夜葬儀諸経偈文集

諸経偈集

こんな経本が
ほしかった

能化必携！

21世紀の経本遂に刊行！

プロが創った

プロフェッショナルのための経本。

緊急、不意の枕経に、お通夜に

能化のお通夜、葬儀のお焼香に

これさえあれば

出先からそのまま回れる。

3つのポイント

◆ポケット版という大きさ！

タテ15センチ、ヨコ8センチ、

厚さ1センチ

◆通夜、葬儀に必要な経文を、

最小限にすべて網羅！

◆経典は、すべて本字にて表記！

内容

廣懺悔

懺悔偈

初夜禮懺偈

佛說無量壽經歡佛頌

佛說無量壽經四誓偈

佛說觀無量壽經真身觀文

回向文

佛說阿彌陀經

一枚起請文

一紙小消息

發願文

脇導師作法

廣懺悔訓誡

定価：2,000円(税込)

送料 1冊	180円
2冊	210円
3～5冊	310円
6～8冊	340円
9～11冊	380円



◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 〈戒法寺内〉

TEL: 03-3441-8971 FAX: 03-3441-8702

郵便振替00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

大本山増上寺蔵・残次二巻本〈重文〉

法然上人絵伝が 絵葉書になった!!

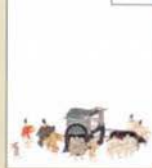
1セット 8枚組

美装封筒入り

定価:800円

(本体+税)

送料別



菩提寺修学の図・牛車

母子の別れと旅立ちの図

菩提寺修学の図・講義

叡山入室の図

後白河法皇に御談義の図

道俗教化の図(立教開宗)

善導和尚来現を拝写せしむる図

阿弥陀三尊影現の図

お申込みは下記まで

発行=法然上人讃仰会

東京都港区芝公園4-7-4

明照会館内 〒105-0011

電話/03-3578-6947

FAX/03-3578-7036

振替/00180-8-82187

上の絵葉書は実物と多少異なります。